

アラビア語における敬語的表現の使用上の特徴 —言語・文化・社会における日本語敬語との違いをふまえて—

エシーバ・ムハンマド

キーワード :

日本語敬語 アラビア語の文語と口語 敬語的表現 敬語の言語・文化・社会的特徴 言語と非言語行動

1. はじめに

本研究では、アラビア語における敬語的表現の使用状況やその表現の使用上の言語・文化・社会的特徴を明らかにすることを目的としている。ここで取り上げるこれらの特徴は、世界言語の中で非常に発達した機能と特徴を持つ日本語の独立した文法項目としての「敬語」を視野に入れ、両言語における敬語のあり方について述べていく。

日本語の敬語は独立した文法項目として発達した機能があると述べたが、アラビア語の場合は日本語同様文法項目としての「敬語」はなく、それほど研究の対象とされることは少ないと筆者はみている。しかし、アラビア語には、場面や話し手と相手との関係や年齢、そしてその他の文化的・社会的な様々な決まりで、相手への尊敬を表す「敬語的表現」がある。この敬語的表現は特に話し言葉としての口語アラビア語で現れることがほとんどであり、書き言葉としての文語アラビア語ではそれほど現れないと思われるが、この課題は文献調査を行うに値する課題であると筆者は考えている。

2. 背景

柴田 (1965 : 8-9) は、言葉のことを習慣だとし、その習慣というのは、ある条件を元にある行動をするという関係が安定していることであるとしている。さらに、ことばは個人的な習慣ではなく、社会の中での習慣であり、相手がいることを考え、その相手と共通のものであることが求められるとも述べている。

またRobbins (1970) では、我々の言語使用に影響を与えるものとして次の3つの要因が挙げられている。

1. 1つ目は、意味である。われわれは何らかの意味を伝達するために、語や文を選ぶのである。
2. 2つ目は、社会組織である。話し手の社会的クラスや身分、あるいは話す状況が固苦しいものかどうか、といった社会的変数は、言語使用に深く影響する。

3. 3つ目は、話し手の間の個人差である。

(Robbins 1970, 高原・本名 訳 1974 : 4)

現代アラビア語には、文語のアラビア語と言われる「フスハー」と口語の「アーンミッヤ」とがある。本研究では、「フスハー」の言葉として使用される敬語的表現ではなく、主に現在の日常生活で使用されるエジプトアラビア語の口語の「アーンミッヤ」で見られる敬語的表現、そしてその他に尊敬や謙譲などを示す言語的、社会的、そして文化的特徴を持った言語・非言語行動に焦点を当て、その分析も行う。なお、ここで取り上げる内容の一部には、エシーバ (2019) の博士論文で取り上げられた内容も含まれており、本課題についての詳しい考察はエシーバ (2019) の博士論文を参照されたい。

3. 現代アラビア語の使用上の特徴と呼称方法とその待遇性

3.1. 現代アラビア語の歴史とその使用上の特徴

口語のアラビア語における敬語的表現について論じる前に、まずは、現代アラビア語の歴史上の特徴と使用状況と環境について述べておきたい。アラビア語はイスラーム教と非常に密接で強固な関係で結ばれており、この特別な関係のおかげでアラビア語がイスラーム教徒の間で聖なる言語としてこのことについて池田 (1976 : 1) は、イスラーム世界の発展と共にアラビア語は、イスラーム文明を支える言語としても重要な役割を果たし、使用範囲も広まったと指摘している。1400 年以上の歴史を持つイスラーム教とその聖典であるクルアーンで使用されている言語は文語アラビア語である。Robbins (1970) は、「古典アラビア語は、コーラン (=クルアーン) によって不滅の言語となった。口語アラビア語がそれとはいかに違ったものになっても、古典アラビア語は今日でも威光をはなっているのである。今でもそれは、あるいはそれに近い言語は、正式の場でよく使われる」と指摘している (Robbins 1970, 高原・本名 訳 1974 : 129)。

また、Kees (2014) では、「アラビア語は、イスラームの古典時代を通じてつねに宗教、文化、行政、学問のすべての目的で使われる威信言語であり、イスラーム時代に入って数百年間は、これらのどの分野においてもアラビア語の地位が深刻に脅かされることはなかった」と述べられている (Kees 2014, 長渡 訳 2015 : 123)。

3.2. 日本語とアラビア語の主な呼称方法とその待遇性

日本語の人称代名詞の呼格的用法では、相手との関係によって使用される表現が異なる。例えば、目上・年上の一般の人および年上の親族に対しては、人称代名詞の使用はできないが、年下・目下の親族に対しては、人称詞で呼びかけたり言及したりすることができる。しかし古来の文語アラビア語

では、親族相手の場合、その概念が基本的に存在せず、多くの場合、目上・年上の相手にも、人称代名詞を2人称として使用したり、言及時の3人称として使用したりできる。一方、日常会話で使用される機会が非常に少ないこの文語アラビア語と異なり口語では、一部の地域、特定の社会的地位・学歴の人において、前述した日本語の人称代名詞の呼格的用法と同様の特徴を持っていると言える。つまり、年上の親族の相手、あるいは年上・目上の一般の相手に対しては、2人称としての「**enta¹/enti**＝貴男／貴女」の使用が不適切となり、その代わりに、「**had⁶retak**＝貴方様」という敬語的表現の使用頻度が高くなる。

エシーバ（2019）で報告されたアンケート調査結果でも明らかになったように、「**had⁶retak**＝貴方様」を使用すると答えた人は、全体の半分以上（53%）であり、敬語を使用する必要がある場合に「あなた」に代わって使用される。エジプトアラビア語では使用頻度が非常に高い表現である。また、両親への待遇表現として、「あなた」という対称詞の代わりに「**had⁶retak**＝貴方様」という尊敬表現が使用される場合があり、その使用割合は「いつも使用する」と「条件付きで使用する」の合計で5割を超えており、多くの人が第三者の同席の場合などで、両親に対してこの敬語的表現を使用していることがわかった。もちろん、親族以外の初対面や目上・年上の相手の場合も、その相手との年齢差や親疎関係等の要素によって人称代名詞（特に「**enta/enti**＝貴男／貴女」）使用の可否が決まる。

さらに、アラビア語では、日本語の敬語とは逆に、他人と会話の中で話し手側の親族および同一家族内の人物に言及するときでも、その家族・親族が高学歴（博士など）やエリート職種（医者、エンジニア、外交官、警官、軍人など）や高レベルの役職などの人の場合、その人への言及時に学位名・職名・役職名などの敬称が使用される場合がある。この場合は、話し手が自分の「ウチ」に含まれる者を高くするということになるが、エジプトの社会では、聞き手にとっても必ずしも不適切な使用になることはないと考えられる。これらの両言語の相違点に対して、両言の最も重要な共通点として挙げられるのは、話し手と聞き手の上下、親疎の関係が非常に重要視され、使用される表現とその敬意度を定める重大な要素であるということである。特に、話し手から見て、聞き手の年齢や地位、学歴などに従って、社会の中でそれにふさわしいと思われる言語コミュニケーションを意識して行動することが両言語話者の共通点であると考えられる。

4. アラブ・イスラームの文化と社会における「尊敬」の概念と敬意度を定める条件

4.1. アラブ・イスラーム文化における「尊敬」の概念

日本語もアラビア語も長い歴史を持つ言語であるが、アラブ文化の日本語との大きな違いの一つは、

¹ 本稿でのアラビア語のほとんどの単語・表現は、主に IPA（国際音声記号）によって記されている。

宗教との綿密な関係であると言える。宗教との強いつながりで、文化と言語が様々な影響を受け、その影響が社会の日常生活における言語行動として現れることが多い。日本語の敬語は、文法項目として発達していることについて述べたが、アラブ文化における「尊敬」の概念は非常に古く根強い。前イスラームの時代から現在に至るまでのアラブ文化には、部族主義というものがあり、社会的地位が重要視されてきた。

イスラーム文化の中にも、聖典のクルアーンや預言者ムハンマドの「ハディース」と言われる言行録で確認することができる年上の人への敬意や呼びかけ語に関する教えがあり、宗教の教えとして広く伝えられている。例えば聖典のクルアーン第 17 章では、両親について次の 2 節がある。

第 17 章 23 節：「あなたの主は命じられる。かれの外何者をも崇拝してはならない。また両親に孝行しなさい。もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちえっ」とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。」

第 17 章 24 節：「そして敬愛の情を込め、両親に対し謙虚に翼を低く垂れ（優しく）て、「主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、2 人の上に御慈悲を御授け下さい。」と（折りを）言うがいい。」

（聖クルアーン第 17 章 23-24 節：聖クルアーンの日本ムスリム協会日本語訳²）

このように、両親への言葉遣い、そして敬意に関するイスラーム教の教えは厳しく、両親への言語・非言語行動は宗教において重要視されていると言える。もちろん、両親とそれ以外の、年齢の差がやや大きい一般の相手も同様の扱いを受けるべきとして、イスラーム社会で子どもや若者などに対して広く教えられていることである。

また、預言者のハディース集成書 *Attermidhi* (1962 : 4 : 321) では、「我々の幼い子に優しくせず、そして我々の老人に敬意を払わない者は、我々の仲間ではない³」と述べられており、これは預言者が神のアッラーからの啓示を受けて信者に発したイスラーム教の教えである。

アラブ文化における「尊敬」は、言葉で表されることも重要であるが、相手への接し方や態度なども非常に重要なものであるということが前述のハディースの内容からも分かる。そのため、相手に対する敬意を表すのに言葉は欠かせないものであるが、アラビア語では、言葉以上の文脈の中に含まれる様々な要素（態度や話の内容など）で待遇性ははっきりと現れると言える。このことは、特に書き言葉としてのアラビア語に言えることであるのは当然だが、部分的に口語の各国の方言にも共通する

² 聖クルアーンの日本ムスリム協会による日本語訳（（第 17 章のページより）
（<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran000.htm>）（2022 年 12 月閲覧）

³ このハディースは、ハディース学者である *ATTERMIDHI* 師が編集者を務めたハディース集成書（*Attermidhi* (1962) 『*SUNAN ATTERMIDHI* 4:321』 *Hadith no. 1919*）による。

ことであると考え。特にエジプトアラビア語には、標準語のアラビア語にはない、数多くの呼称語としての敬語的表現が存在しており、社会の変化に柔軟に対応し、自然なコミュニケーションに大きく貢献していると言える。

また、アラブの文化の中には、「気前の良さ」、「接客」、「両親および両親の兄弟姉妹・友人への孝行」、「年上の人への尊敬」や以下に紹介する「謙遜」の概念などが日常生活の中で重要視され、イスラーム教の教えと共に強調されてきた。これらの道徳の遂行は、アラビア語では言語行動のみならず、文脈や実際の非言語的行動としての面もある。

対人コミュニケーションにおける非言語行動については、Knapp (1972)、伊藤 (1991)、大坊 (1998) などの研究でその重要な役割について論じられてきた。これらの研究によれば、対人コミュニケーションの過程には、言語的情報や行動だけでなく、非言語的情報・行動も無数にあり、意識化されるレベルは低くても、非言語的行動にも表出する情報やそこから得られる情報は、むしろ言語的情報より多いとされている。特に、大坊 (1998: 17) は、非言語コミュニケーションに含まれるものについて、視線の他にも音声の形式的側面 (発言と沈黙のタイミング、抑揚、大きさなど、近言語的特徴)、顔の表情、ジェスチャー・姿勢や動作、外見、服飾などを挙げている。また、同書で、「非言語的なチャンネルは意識される程度は低く、好悪などの感情の伝達などに適しており、言葉の不足を補う言語的コミュニケーションの代替としての意味が大きいと言われています。一般には、言葉がまず意識されがちですが、実際には、チャンネルの多様性という点だけでなく、非言語的コミュニケーションの占める説明力は大きい」と述べられている (大坊 1998: 20)。

Knapp (1972) は、「非言語ということばは話しことば・書きことばを超えた人間の情報伝達活動のすべてを記述するのに使われるのが普通である」と指摘している。さらに同書で、「非言語情報伝達が重要なのは全情報伝達体系の中で演ずる役割のためと、どのような特定の状況においても絶大な量の情報を提供し、われわれの日常生活の基本的な領域に使われるためなのである」と述べている (Knapp 1972, 牧野 訳 1979: 25)。

日本語の敬語における非言語行動・非言語コミュニケーションについては様々な研究があり、日本語においても非言語的行動・コミュニケーションが非常に重要な課題であることは言うまでもないことである。

日本社会で、相手への尊敬を表す日常的な非言語的行動として、お辞儀が挙げられる。ジェスチャー、顔の表情、姿勢、態度、イントネーション・声の大きさなどもコミュニケーションの成功に大きく影響しているものと考えられ、言語行動に関しても、日本語やアラビア語のみならず、世界言語共通の普遍的な現象であると思われ、様々な形で各社会の特徴と言語文化習慣などに特化したものが多く、多様性に満ちていると考えられる。

アラビア語においても、代表的とも言える非言語行動の例の一つに、最も尊敬をすべき存在として

の両親に対して、子どもが両親の手の甲の部分にキスをするという行為がある。たとえ他人の同席の場合でも、その行為を熱心に行おうとする人が少なくなく、親に対する高レベルの非言語の敬意であると言える。宗教的にはこのような行動がはっきりと伝えられていないが、親孝行の行動の一つとしてエジプト・アラブ社会のみならず、イスラーム世界でしばしばみられる行動である。特にエジプトにおいては、都市部より農村部地域でこの行為が広まっており、高く評価される行動であると言える。

また、もう一つ代表的な非言語行動の例として、両親を含む年上・目上の相手に対する次の行動が挙げられる。両親や目上・年上（特に年齢の差が大きい場合）の相手が、自分が座っている場所に入るといった場面の場合、必ず子ども、目下・年下の側が立ち上がって挨拶をしたりし、握手する（両親以外の場合）行為である。また、両親や目上・年上の相手以外にも、初対面や年下の相手でも親しくない場合などに、その相手に対して立ち上がらないまま握手しようとする、周りから批判されたりし、無礼な行為に当たるとされる場合もある。これらの非言語行動は、言語の領域を超えた、社会文化および宗教などを基にした行動であるため、エジプト社会のみならず、ほとんどのアラブ社会に共通する行動であると考えられる。

4.2. エジプトアラビア語における「尊敬」の対象者への敬語的表現とその敬意度を定める条件

次の1. から4. では、エジプトアラビア語での上下関係を基にした敬意度を定める条件について述べる。これらの条件は年齢や社会的地位や学歴などによって決まり、社会の中では暗黙了解として意識され、また、教育の場や家庭での子供へのしつけとして扱われる場合もある。

1. 年上（学歴・地位などにおいて）で目上の相手

- 初対面および親しくない相手
- 親族・知り合い等の相手

2. 年上の相手（目上の条件無し）

- 初対面および親しくない相手
- 親族・知り合い等の相手（特に年齢の差が大きい場合）

3. 年下（学歴・地位などにおいて）で目上の相手

- 初対面および親しくない相手
- 親族・知り合い等の相手（特に他人の前の場合）

4. その他（年齢に関係なく）

- 年齢や地位などの要素がない初対面および親しくない相手
- 高学歴（博士など）やエリート職種などの親しい相手（他人の前の場合のみ）

尊敬度の順は、1.から4.までの4段階で、1.が最も尊敬度が高く、それぞれの段階で使用される表現とその敬意度が変わることを表している。エジプトアラビア語の敬語的表現およびその使用条件は、学校などの正式な教育の場面で教えられるものではなく、社会の中で習得される言語社会的行動であると言える。

特に1.にあるように、初対面および親しくない年上の相手との年齢差が大きければ大きいほど、使用される表現とその敬意度が高くなる。また、その年上の相手が親族の場合でも、親族以外の場合と同様に、高いレベルの丁寧な言葉遣いが求められる。親族相手の場合は、その相手との親疎関係次第で使用される表現とその敬意度が下がることもある。2.では、学歴や地位等と関係なく、年齢差が大きい相手に対する敬語的表現のレベルが、エジプト社会のみならず、アラブ・イスラーム文化においては大きいものと考えられる。

3.では、相手が年下にもかかわらず、話し手から見て高学歴で社会の中でエリートとされる医者や裁判官、博士などのような人物であれば、呼称時に尊敬を表すための呼称表現が使用される場合があり、決まった敬称を使用することが当たり前のようにになっている。この場合の相手は、初対面や親しくない知り合いのみならず、年下の親族相手の場合もあり、年下の相手に対しても該当する敬称が使用されるが、多くの場合は、他人の前での使用の方が多い。親しくない相手に対して「医者や裁判官、博士」などの敬称・称号が使用されないと様々な問題が発生してしまうことが予想され、コミュニケーションのみならず、人間関係にまで影響してしまう場合もある。

最後の4.では、普通レベルに近い段階で、年齢差および上下の要素がなく、初対面で、年齢が近く、目上とは言えない場合の相手である。この場合は、敬称が使用されたり、されなかったりすることになり、いずれの場合も適切と見なされる。また、相手が親しい友人・同級生などの場合で尊敬の対象になる場合もある。その具体的な例としては、その相手が高学歴（博士など）やエリート職種（大学教授・医師・検察官・裁判官・警察官・軍士官など）の場合、特に他人の前という場面において学位・役職名称などを使って呼びかけるという場面が挙げられる。

最後に、上記1.～4.以外にも、エジプト社会での特殊な呼称方法があり、その呼称方法について述べる。エジプト社会における呼称表現の選択・決定の場面の独特な例として、初対面の相手の服装、見た目、そして方言などで待遇表現を決めるという呼称方法が挙げられる。この方法では、相手が特に初対面の相手で、特定の服装（作業服や伝統的衣装の「Gallabiyah（ガラバーヤ）」など）をしている人や、その相手の格好や方言などが目立つような人に対して、その服装や見た目の特徴的な部分

を基に、その人への呼称表現を決めるということがしばしば見られるということである。

もちろん、その時に使用される表現は、相手を高くする敬称としての表現もあれば、相手のことをよく知らないにもかかわらず、服装や見た目にあったと思われる表現を決めるため、場合によってはその表現が不適切である場合もある。例えば、相手がネクタイ・スーツなどのフォーマルな衣装を着た人（特に初対面や親しくない知り合いの人）の場合、**enta/enti=貴男/貴女**の使用が不適切となり、その代わりに、「**had^oretak=貴方様**」という表現が使用される可能性が高いという例が挙げられる。

4.3. アラビア語の「謙遜」という概念の宗教的・社会的特徴

日本語には、「ウチ」と「ソト」という概念があることについて上述してきたが、それに対しアラブ文化には、「謙遜」という概念があり、話し手が謙遜をする必要がある場面では、選択される自称詞がその概念に沿って変わってくるという特徴がある。

アラブ文化とアラビア語は、1400年以上前から始まったイスラーム教に大きな影響を受けており、その影響がアラブ人の思考や行動にまで表れることが少なくない。そのため、「自慢」や「謙遜」のような概念があり、人称表現において現れることが少なくない。特に「謙遜」という概念は、イスラーム教とアラブ文化において根強く、美德とされるものの一つである。また、「自慢」の行為についても、敵対する相手などに対して必要とされる場合があり、そのときに「自慢」の表現形式が使用されている。「謙遜」が指す意味は、話し手が何らかの成功を成し遂げたり、優れた才能があったりする場合に、聞き手である他人（特に、目上・年上の相手）に対して、自分が相手より高い地位および優れた才能などがあると思わせないようにし、自分を低くするということである。さらに、自分を高め、自分の成功や才能を意識して周りからの評価を求めたりしないようにするといった意味合いも含まれている。

一方「自慢」の概念には、これと反対の意味と目的があり、特に話し手と敵対関係およびライバル関係の相手に対して自己を誇張する表現が使用される。なお、特に「自慢」の概念は主にイスラーム時代以前の古典アラビア語で多く使用され、詩などの文学作品に多く残されている。

エジプトアラビア語における「謙遜」の表現方法として、使用される自称詞を控えめな表現にする目的で、「**ana=私**」という一人称代名詞の使用を避ける人がいる。また、「**ana**」を使用した場合でも、その直後にアラビア語で、「(私) という語から神のご加護を」という謙遜の意味を表す表現が追加されたりする場合もある。その理由として考えられるのは、「**ana=私**」という表現は、「自己中心」の意味を表し、謙遜な精神を欠いた表現であると考えられる人がいるためであると考えられる。

さらには、自分を低くする目的で、「**ana=私**」などの自称詞の代わりに「**elʕabd lillah=神の忠臣**

4) という表現が自称詞として用いられる場合もある。そして、相手との親近感を強く表す表現として、相手に対して「**axu:k / uxtak**=あなたの兄・弟／姉・妹」という表現が使用され、話し手が目上・年上の場合、謙遜表現として扱われる場合がある。前述の「謙遜」の概念が現れる場面は、通常の場合とは言えず、話し手と聞き手から見て文脈的に特段謙遜をする必要があると思われるような立場や場面や、話し手が傲慢であると間違えられやすい場面などであると考えられる。

5. おわりに：

日本語とアラビア語における呼称方法は様々であり、両言語にはほぼ同様の呼称方法がある。その呼称方法は、名詞（代名詞、名前、親族名称、敬称や役職名称など）の他に、動詞形による呼称方法もある。これらの方法以外にも、呼称語を用いない呼びかけの方法も両言語に存在し、特に日本語の場合は、呼称語を使用しない場合の方が、呼称語を使った呼称方法の場合よりコミュニケーションにおいて自然になる場合がある。

日本語の敬語には、重要な役割を持つ「ウチ」と「ソト」という概念があり、自分のグループの人物を「ソト」の他人に対して低くするが、アラビア語にはこの概念がなく、年上の「ウチ」である年上の親族の相手を、他人に対して低く述べることはできない。特に両親などの親世代の親族の相手への他人の前での敬称や敬意の伝達は、「ソト」である他人から年上への配慮として評価されることもある。

アラビア語には、日本語などの言語のような敬語が非常に発達した機能を持つ言語とは異なり、文法的カテゴリーとしての敬語がなく、日本語と比べると、敬語的表現の数が少なくその使用上の違いが大きいと言える。これに対して文語アラビア語と異なりエジプトアラビア語には、多様な敬語的表現がある。エジプト・アラブ文化における敬語の概念については、相手を高くし、自分を低くするという概念よりも、相手への敬意の表し方、相手への配慮・社会の中での地位を意識した敬語的表現が使用されるということになる。

また、アラビア語では敬語的表現が発達していない一方、目上・年上の相手への配慮や敬意が表される方法としては「文脈型敬語」、「非言語行動による敬意の伝達」の他に、「謙遜」などの概念があり、敬語的表現が使用されない場合でも、相手への評価や称賛が、様々な形で相手への敬意として伝達される。

4 「**elʕabd lillah**」という表現の直訳は、「神のための奴隷」であるが、イスラームの文化では、神の奴隷という表現の「奴隷」は、マイナスの意味ではなく、誇らしいこととして高評価の謙遜表現である。そのため、正確な日本語訳は、文字通りの意味ではなく、「神の忠臣」となる。

参考文献：

池田修（1976）『アラビア語入門』岩波書店

伊藤哲司（1991）ノンバーバル行動の基本的な表出次元の検討 実験社会心理学研究 31 1-11

エシーバムハンマド（2019）『日本語とエジプトアラビア語の呼称表現とその待遇性の研究』千葉大学大学院人文社会科学科博士論文

蒲谷宏（2006）『敬語表現教育の方法』大修館

柴田武（1965）『ことばと社会学』NHK ブックス；22

大坊郁夫（1998）『しぐさのコミュニケーション - 人は親しみをいかに伝えあうか』サイエンス社

妻仁一（2009）『アラビア語文法ハンドブック』白水社

Kees, Versteegh, (2014), *The Arabic Language*, Second Edition, Edinburgh University Press. (長渡

陽一 訳 (2015) 『アラビア語の世界 歴史と現

Robbins, Burling, (1970), *Man's Many Voices: Language in its Cultural Context*. (原脩・本名信行

訳 1974) 『言語と文化：言語人類学の視点から』ミネルヴァ書房

在』第1刷 三省堂

Attermidhi, Jāmi', 1962, *Sunan Altermidhi*, 4-321 (Hadith no. 1919) , Mustafa Alhalabi Printing and library, Cairo (Attermidhi 師による預言者ムハンマドのハディース (言行録) 集)

聖クルアーンの日本ムスリム協会による日本語訳 ((第17章 23~24 節)

<http://www2.dokidoki.ne.jp/islam/quran/quran000.htm> (2022年12月閲覧)

(えしーば むはんまど・アインシャムス国立大学 (エジプト) アルアルスン (言語) 学部日本語
学科専任講師)

The Characteristic features of Honorific Expressions in Arabic

-Focusing on the differences with Politeness in Japanese-

Mohammad Eshiba

Summary:

There are various methods and forms of address in Japanese and Arabic, and both languages have almost the same methods of address. In addition to nouns (pronouns, names, names of kinship, honorifics, job titles, etc.), there is also a verb form of the method of address. Also, there are ways of addressing people without using descriptive words in both languages, and in the case of Japanese in particular, communication without using descriptive words is more effective than addressing with descriptive words. can be natural in communication.

Arabic does not have honorifics as a grammatical category, unlike languages such as Japanese, which have highly developed functions of honorifics. It can be said that there is a big difference in usage. On the other hand, unlike literary Arabic, Egyptian Arabic has a variety of honorific expressions. Regarding the concept of honorifics in Egyptian and Arab culture, rather than the concept of elevating the other person and lowering oneself, it is a way of expressing respect for the other person, consideration for the other person, and honorific expressions that are conscious of one's position in society will be used.

In addition, while honorific expressions have not developed in Arabic, there are two ways to express consideration and respect for superiors and elders: "Contextual Politeness" and "conveying respect through non-verbal behavior". In addition, there are concepts such as "humility", and even when honorific expressions are not used, evaluation and admiration of the other party are conveyed as respect to the other party in various forms.